東北アートの循環系 そのサイズとペース。

東北各地で、地域に根ざしたさまざまなアートスペースやプロジェクトが存在します。それぞれの規模で展開されている活動は、必ずしもアート作品の鑑賞などが中心ではなく、ある種意図的に、地場で営まれている生活の一部として共存しようとしているようです。だからこそ、それらのアートスペースやプロジェクトは、地域にとってちょうどよいサイズ感のなかで、静かな一石を投じながら、少しずつ文化的な循環を生み出そうと試みているように思えます。

このゆるやかな循環を、いかに人々の生活と地続きのものとして浸透させ、持続可能なものとしていくのか。これらの場所を訪れてみることも、その解決への道のひとつなのかもしれません。

01 消えゆくモノづくりの文化をつなぐ拡張家族

佐々瞬

「アメフラシ」は、村上滋郎、松崎綾子、池田將友、金東玉を主なメンバーとする、山形県長井市を拠点にしているプロジェクト集団です。代表的活動〈アーティストの冬仕事〉では、かつて作られていた「金井神箒（かないがみほうき）」の素材であるホウキモロコシの種を譲り受け、栽培と作り方を一から継承し、箒を製作しています。〈草鞋プロジェクト〉は、伝統行事の黒獅子祭りで使用されている草鞋の作り方を記録したり、草鞋のための穂の長い稲作りをその地域で継続できるような手伝いなどをしている活動です。いずれも長井という場所を特徴づける伝統的な文化を繋ぎ止めようとするものです。

それらの活動拠点となっている「Kosyau（こしゃう、長井の方言で〝作る〟の意）」は大きな廃工場を改装したスペースで、スタジオや事務所としての機能のほか、イベントやワークショップのための会場になったり、ショップ、飲食スペースとして活用されています。

私が縁あって「Kosyau」で滞在制作をさせてもらっていた、ある日の夕方のことです。みんなで一緒にご飯を食べるため、アメフラシのメンバーが集まってきました。地域で採れた野菜が並ぶキッチンに立つのは長井育ちのメンバーの同級生で、美味しそうな料理の香りがしてきます。長井在住のアーティストや建築家、遠方から来たアーティストやメンバーの家族が続々と集まり、いよいよ賑わってきます。すると、アメフラシのメンバーから、用意された料理とビールの説明があり、いよいよ乾杯の時です。なみなみと注がれた手作りのビールは、地元の植物で香りづけされたクラフトビールです。仕事や生活の話、長井の歴史に政治やアートの話、終盤には恋愛の話に花を咲かせます。それぞれの人が仕事場や家庭での立場や役割から少し解放されたような時間を過ごしています。私にも心地よい酔いが回り始めたころ、代表の村上さんから話を聞きます。

「経済や農業、生活スタイルが変化する中で農家や作り手に負担の大きい箒作りや、数日で使えなくなってしまう草鞋が消えて行ってしまうことの方が自然なのかも」そんな活動をめぐる葛藤が語られます。

アメフラシはモノづくりの継承に取り組むことを通じて、その文化の基盤であるかつての人々の関係性そのものが消えつつあることを最前線で実感しているのかもしれません。気がつくと子どもたちは、廃工場のそこら中を遊び場にして駆け回っています。面倒を見ているのは親ではないようで、もはや誰の子どもなのかわからない状況です。夜も更け、やがてプロジェクトでもなんでもない、名も無き集いが終わります。

みんなが帰って私は一人になりました（滞在中、Kosyauに寝泊まりして制作していました）。リノベーション後も残された廃工場の古い土壁を見ながら「アメフラシは拡張家族のような場になりたい」と言っていた村上さんの言葉が思い出されます。考えてみれば、かつての手工業も家族単位で営まれていたものが少なくありません。アメフラシは変化していく地域社会の中で、新たな共同体を作るためにモノづくりに取り組んでいるのか、はたまたその逆なのか、そんなことに思いを馳せますが酔いすぎた私には解る訳もありません。いい気分のまま、子どもの汗の匂いがするソファーに横になり、毛布にくるまって私は眠りについたのでした。

01-1／草鞋を編む様子。

01-2／「アメフラシ」メンバー。左から池田將友、松崎綾子、村上滋郎、金東玉。Kosyauにて。

寄稿者・スペース情報

▼01 佐々 瞬（ささ・しゅん）
1986年仙台市生まれ。公園として再整備された追廻地区にかつてあった暮らしを調査する活動や、農家さんの田んぼの土や稲藁を素材とした小屋を作る活動を行う。
スペース情報 Kosyau
山形県長井市十日町1丁目1-9-2-1
info@amefurashi.com

▼02 高田 彩（たかだ・あや）
1980年宮城県塩竈出身。2004年エミリー・カー美術大学卒。brid studio代表、2006年ビルドスペース開廊。国内外で企画運営を行う。2014年より塩竈市杉村惇美術館統括。
スペース情報 本多工房
宮城県塩竈市北浜1丁目1-40
080-3198-4918
info@bridotugas.com

▼03 永沢碧衣（ながさわ・あおい）
1994年生。秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻卒業。秋田に在住しながら狩猟・マタギ文化に関わる中で「人と生物と自然」の関係性を問う絵画作品を制作している。
スペース情報 ものかたり
秋田県南秋田郡五城目町字上町39
018-802-0089

02 新たなまちの風景を生みだす〝工房〟へ

高田彩

「アトリエや滞在制作できる場所はないか？」。アーティストらとの何気ない会話の中でよく耳にする一言です。私自身、宮城県内のアーティストからの相談で、シェアアトリエなどの制作場所を探すことがよくあります。宮城県は、たくさんの工芸作家たちが工房を構える秋保町が有名であるものの、山形県など、近隣地域と比べてアーティストの制作環境が整っているとは言えません。〝県内に新たなシェアアトリエができた〟という嬉しいニュースが届くこともありますが、運営を長く続けることは簡単ではないようです。

「地域にアトリエがある」ということは様々な意味を持ちます。アーティストの制作場所であることはもちろんですが、例えば、地域住民との交流場所になったり、地域活性化のきっかけになったりすることもあります。また、美術現場に関わる人にとっても貴重な場です。残念ながらCOVID-19の影響もあり機会は激減していますが、県外から美術関係者の来訪があれば、さまざまなアトリエに案内し、県内のアーティストの制作現場を肌で感じてもらっています。反対に、自分が遠方や海外へ出張する際はかならず現地のアトリエを訪問し、アーティストとの交流を楽しんでいます。なかでもシェアアトリエは、一度に様々な制作現場に立ち会う醍醐味を味わえる場です。

近頃、再び制作場所に関する相談が増えてきています。どうにかその声に応えられないかと空き物件情報を探し、内見を繰り返してきました。広さ、家賃、利便性などの条件が合わないことが多い中、ついに好条件の中古物件に出合えました。東北工業大学新井研究室の協力のもと、学生や地域の人々とともにDIYで改修したその建物は、ビルドフルーガスが運営母体となり、シェアアトリエ「本多工房」として2022年11月にオープンしました。本塩釜駅前に立地するこのアトリエには個室の制作場だけでなく、共有の多目的スペースや滞在制作用の宿泊部屋など、これまで地域に不足していたアーティストのための機能を備えています。

塩竈市内にはもともと表現を共有する〝ギャラリー〟と、アートをパブリックにひらく〝美術館〟があり、ここに作品を生み出す〝アトリエ〟が新たに加わりました。民間と行政がおのおの運営するこれらの3拠点は、駅を中心に徒歩圏内に集まっています。5万人規模の小さなまちで、それぞれの拠点をたくさんの人々が行き来し、きっと新しいまちの風景を作ってくれるでしょう。

震災から10年以上が経過します。石巻のようにアーティストが移り住む場となった地域もありますが、制作に区切りをつけて県外へ旅立った人も多くいます。アーティストは、渡鳥のように活動しやすい場所へ移動するもの。制作環境や発表の場など才能を発揮できる機会がなければ、次の目的地へ飛び立ちます。まちの風景を豊かにする可能性を秘めた彼らの目的地に宮城県がなれるよう、環境整備を続けていきたいと思います。

02-1／「本多工房」外観

02-2／「本多工房」アーティストのアトリエ

03 日常と表現の狭間で語り合う、小さな街の大切な余白

永沢碧衣

「ものかたり」は「合同会社みちひらき」が2016年から秋田県五城目町で運営しているアートギャラリーです。代表の小熊隆博さんは、地域おこし協力隊として五城目町に帰郷し、前職である「ベネッセアートサイト直島」での在籍経験を活かしながら、小さな街中でもアートに関わりを持てるようにと新たな拠点を誕生させました。〝ものかたり〟という名前は、ミュージアムの本質を再考し、展示されている〝もの〟が〝語る〟ことをイメージした造語です。この意識された柔らかな言葉の響きや古民家をリノベーションした空間独自の心地よさ、ギャラリーとしての敷居の高さを上手にコントロールされているおかげ、訪れるたびに日常と非日常の境界線上をふらっと散歩してきたような不思議な感覚にさせてくれます。

みちひらきと秋田公立美術大学が地域連携パートナーであることから、ものかたりは事業の重要活動拠点にもなっています。私が学生の頃に参加していた地域×アートプロジェクト〈AKIBI plus〉（2016–2018）では、五城目町において参加者がフィールドワークの中で採取した情報を持ち帰り、専門家や町人講師を交えながら、多角的な視点で解析していくための基地となっていました。

成果展「ど思ったば、カケラだった」（2018）では、20世紀はじめの日々の暮らしを記録した畠山鶴松の『村の落書き』をベースに、参加者によるフィールドノートや写真、落書きが展示されました。会期中に巻き起こった街の声が落書きを伝い、ギャラリー全体を自由に使って描き足されていく様子から、地域の今と昔が凝縮された濃厚な展示となりました。

さらに独自の企画として、教育×アートプログラムを開発しています。私自身が講師として携わった「未感性教室」（2018–2019）では、街歩きの道中から描きたいことや色の素を発見し、画材を一から制作して、最終的に作品展を企画してみるというプログラムを実践しました。共同作業と個人制作を往復する表現活動の基礎を学びつつ、身近な人や物から構成された作品が街中へ飛びだしていく試みでした。

この場所は誰もが表現活動を一緒に楽しみ、ギャラリー展示やショートレジデンスができる可能性を提示した上で、質の高いキュレーションや表現方法を学ぶことができる実践の場として機能しています。しかし、その内容はいわゆる芸術分野に限られたものばかりではありません。

ここ数年で五城目町はベンチャー起業家や学生が学習旅行で訪れたり、そのまま移住して定着したりと、まちづくりの観点からも魅力的なコンパクトシティとして注目されつつあります。その一端を担うように、ものかたりのギャラリー空間が与えてくれる程よい街の余白は、他所から訪れたアーティストやこれからの地域を見据えている若者の自己表現が、地元住民と垣根なく交わることが叶う場となり、何かを突き動かすエネルギーを探索できる重要な起点となっています。

複合的でひとつの答えなどないモノゴトを語り合うには欠かせない、日常と表現の反復の狭間にある時間と空間の大切さを伝えてくれる「ものかたり」のさらなる展開がとても楽しみです。

03-1／「ものかたり」外観

03-2／「ものかたり」内観

04

川俣正さんと仙台インプログレス「記念・祈念」から「伝承」、そしてその先へ

小田原のどか

旧北上川河口から阿武隈川河口までをつなぐ貞山運河は、慶長2（1557）年から明治17（1884）年にかけて建設された日本最長の運河（総延長約46・4キロメートル）です。2022年8月、ここに一日限りの橋が架けられました。

宮城県仙台市宮城野区新浜地区を流れる貞山運河に、東日本大震災の津波で流された橋がじつに11年ぶりに「船橋」として再建されたのです【04−1】。これは、アーティスト・川俣正さんが手がけるアートプロジェクト「仙台インプログレス」の一環として実現しました。

船を並べてつなぎ、その上に板を渡して橋の代わりとする船橋は、洋の東西を問わず古来用いられてきた技術です。98−117頃につくられ、後世の記念柱の形式に決定的な影響をもたらした「トラヤヌスの記念柱」のレリーフにも、船橋の姿を認めることができます【04−2】。日本において船橋は、現存する最古の和歌集・万葉集に詠まれているほか、日清戦争を描いた梅翁国利の錦絵にも記録されています【04−3】。

2017年から始まった仙台インプログレスは、時間を掛けた取り組みとして現在も継続され、6年目を迎えます。新浜地区の人々からの「橋が津波で流されて運河を渡れなくなった」という切実な意見に端を発し、貞山運河に橋を掛けるという着想が「みんなの橋プロジェクト」となりました。

04-1／川俣正《みんなの橋（テンポラリー）》小田原撮影

川俣正さんによるみんなの橋プロジェクトは「みんなの家」に由来します。震災直後に5人の建築家によるボランティア団体「帰心の会」によって提案され、伊東豊雄さん、妹島和世さん、山本理顕さんらが中心となって被災地に建設されたみんなの家。その第一号は2011年10月に仙台市宮城野区内の仮設住宅に造られ、2017年4月に「新浜みんなの家」として移築し、いまも地域コミュニティの回復や住民の活動拠点として活用され続けています。

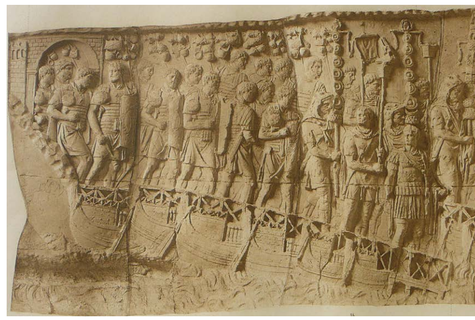
みんなの橋プロジェクトは仙台インプログレスの核を担います。しかし、事はそう簡単ではありませんでした。以前の橋は住民の手で架けられた生活のためのものだったこともあり、貞山運河への恒久的な橋の建設は難しく、みんなの橋プロジェクトは多様な展開を経験することになります。

2018年には貞山運河の渡し船ともなる《みんなの船》がつくられました。2019年には貞山運河から海側に広がる防災林に《みんなの木道》が設置されます。この木道は、海難防止と海上安全を祈願するために建立された「八大龍王碑」を見るためのベンチとしての機能も持っています。加えて、木道の先に建立された、昭和期の植林事業を記念する「愛林碑」への動線ともなり、「愛林碑」と「八大龍王碑」の2つの石碑が伝えるこの土地の歴史に橋を架けました。

翌年、《みんなの木道》は貞山運河から内陸の地区にも延長され、運河をはさんで両側を水平の視点でつなぎました。2022年4月には、垂直の視点として、貞山運河の松林や湿地、堤防と水平線を眺めることができる物見櫓《新浜タワー》が完成します。そしてついに念願であった橋が運河に架かりますが、船を用いて橋にする発想は工法も含め、川俣さんと川俣さんのチームと、新浜地区の住民のみなさんとの対話の中から生まれています。

2021年から、私は仙台インプログレスの様子を見学させてもらいました。見学に訪れた最初の数回は、パリ在住の川俣さんはコロナ禍で来日がかなわず、リモートでの作業が続いていました。そんななか印象深かったのが、このプロジェクトのキーパーソンとしての新浜地区の方々の存在です。

貞山運河では、新浜地区の方々が主催する「新浜フットパス」というイベントが定期的に実施されています。毎回、遊び心にあふれた新浜フットパスは、せんだいメディアテークが主催する仙台インプログレスと連携しつつ、独自のイベントとして開催を重ねています。仙台インプログレスを支援するとともに、新浜フットパスに全力で取り組む新浜のみなさんの姿は、「アーティストが主導するアートプロジェクトに参加する地域の人々」というステレオタイプを刷新する力にあふれていました。



04-2／トラヤヌスの記念柱に刻まれた船橋のレリーフ　ウィキペディア・コモンズ

日本を代表するアーティストのひとりである川俣さんは、1980年代からアートプロジェクトに取り組む草分け的存在です。完成された作品という結果だけではなく、アーティストがあらゆる物事と関係を結びながら進行していく過程を重視するアートプロジェクトは、美術館に収蔵される作品を主体に紡がれてきた美術の歴史にとって、まさに画期でした。

他方、その後の日本におけるアートプロジェクトは、行政主導の地域活性化の取り組みとも密接に関わりながら、各地で林立します。ともすると住民参画・地域おこしという目的ばかりが先行し、その意義が形骸化しているのではないかと批判にさらされることもあります。しかしながら、新浜地区を舞台にした仙台インプログレスの展開は、そのような批判をものともしない内実を備えていました。

この度完成した船橋は、《みんなの橋（テンポラリー）》と名づけられました。橋を架けることは、多様な比喩としてわれわれの文化の中に息づいています。17世紀につくられた狂言に「橋が無ければ渡られぬ（なかだちがなければ物事はうまく運ばない）」という台詞があるように、架け橋という言葉は双方を取り持つことや、分断された関係性を再構築する文脈でも用いられます。

だからこそ、川俣さんの《みんなの橋（テンポラリー）》は、津波で壊れてしまった橋をつくりなおすプロジェクトというだけにはとどまりません。絶たれた回路をつなぎなおし、津波や地震という天災と人の営みとの関わりに、今一度橋を架けるものだと言えるでしょう。そして同時に注目したいのが、船橋が持つ歴史です。

トラヤヌスの記念柱に刻まれた船橋は、第一次ダキア戦争（紀元前101〜102年）においてローマ帝国軍がダキア人を攻めるため、ドナウ川を渡る際に用いられたものです。また、梅翁国利の錦絵は、朝鮮半島北西部を平壌へと流れる大同江を舞台とした戦闘における船橋の活用を描いています。

船橋は、古代から軍事活用とともにありました。近年では、イラン・イラク戦争、ロシアによるウクライナ侵攻においても、船橋は技術として重用されています。そのような人間と船橋の歴史の先端にある《みんなの橋（テンポラリー）》は、2022年というこの時期に完成したことでいっそう、破壊や略奪ではなく分断を架橋し、橋を架けることの本来の可能性を示したように思えます。

そしてもうひとつ、仙台インプログレスの解釈の可能性を指摘したいと思います。

日本列島周辺での観測史上最大となる大地震、東北地方太平洋沖地震が発生した2011年3月11日14時46分から11年が経ち、3・11の実相を記憶するため、被災地には数多くの「震災伝承施設」がつくられました。震災の爪痕がいまだに残る土地も多いなか、震災遺構を保存・活用するものや、アートプロジェクトの手法を取り入れるもの、現代アート作品を配したものなど、各施設には工夫が凝らされ、伝承の模索が試みられています。

ところで、東北地方太平洋沖地震が東日本大震災と呼ばれるのは、大震災が「大きな地震による災害」を意味するからです。東日本大震災とは、東北地方太平洋沖地震が引き起こした津波、そして原発事故による災害の総称です。現在（2022年10月時点）、震災伝承施設は309ほどあり、国土交通省が推進する「3・11伝承ロード」の構成要素となっています。しかし、そのほとんどが津波被害に焦点を当てたものであり、原発事故とその実相や被災者の経験を取り上げる施設は管見の限り、0・1%に届きません。

04-3／梅翁国利《我陸軍工兵大同江ニ船橋ヲ造リ敵ノ対岸ニ至ル　日本兵大勝利之図》1894年　国会図書館蔵

個別の震災伝承施設において、津波被害の伝承が重視されるいっぽうで、同じく東日本大震災によって起こった原発事故の被害と被災者の個別の経験や苦しみの伝承は、どのようになされるのでしょうか。放射能という見えない被害にさらされた人々の経験はいかに伝承できるのでしょう。「震災伝承」の名のもとで隠れてしまったものを丁寧に見つめる必要があるのではないでしょうか。

また、「伝承」が強調される風潮に関して、ある事実を無視することはできません。それは、震災伝承施設のほとんどが、「伝承」の英訳にmemorialを当てていることです。例えば、津波により甚大な被害を被った宮城県気仙沼向洋高校の校舎を利用した「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」の英訳は、Ruins of the Great East Japan Earthquake Kesennuma City Memorial Museumです。

また、「東日本大震災・原子力災害伝承館」は、震災伝承施設の中では数少ない「原子力」を施設名に冠した伝承施設ですが、英語ではThe Great East Japan Earthquake and Nuclear Disaster Memorial Museumと表記されます。

では、これまでmemorialが当てられた国内の施設にはどのようなものがあったのでしょうか。代表的な施設を以下に挙げます。

広島平和記念資料館
Hiroshima Peace Memorial Museum

広島平和記念公園
Hiroshima Peace Memorial Park

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
Nagasaki National Peace Memorial Hall for the Atomic Bomb Victims

沖縄県平和祈念資料館
Okinawa Prefectural Peace Memorial Museum

阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター
The Great Hanshin-Awaji Earthquake Memorial. Disaster Reduction and Human Renovation Inst

04-4／鈴木春信《見立伊勢物語（八つ橋）》江戸時代・18世紀 東京国立博物館蔵

ここからわかるのは、3・11以前、メモリアルの訳語は「記念」あるいは「祈念」であったということです。震災伝承施設の普及以降、「伝承」が訳語として使われるようになっていきます。つまり、東日本大震災を経て、メモリアルの意味合いが「記念・祈念」から「伝承」へと転じたのです。この変化は日本という国にとって、小さくない意味を持っているはずです。その意味を問うための手掛かりが、仙台インプログレスにあるのではないでしょうか。

「みんなの橋」の呼び水である《みんなの木道》を初めて歩いたとき、この木道がまるで鈴木春信による《見立伊勢物語（八つ橋）》のように見えました【04−4】。鈴木春信は、伊勢物語に描かれた男たちの望郷の逸話を本歌取りし、「見立て」の手法によって女性の物語に変えてしまいました。

仙台インプログレスにより実現した船や木道や船橋は、渡し船や、ある地点からある地点へとつなぐもの、運河を渡るものというように、明確な機能を持っています。同時に、「愛林碑」と「八大龍王碑」をつないだように、川俣さんの取り組みは場所だけではなく時間をもつなぎます。そしてまた美術作品としての木道や橋や物見櫓は、本来の機能を超える「見立て」の力を備えています。

04-5／川俣正《みんなの木道》小田原撮影

新浜地区との関わりを起点に、「仙台インプログレス」の貞山運河のほかの地区への展開が試みられています。具体的には、若林区荒浜地区、井土地区との関わりの模索が始まっているそうです。とはいえ、新浜地区と荒浜地区、井戸地区の事情は大きく異なります。

荒浜地区は、津波の危険により住宅の新築や増改築を制限する「災害危険区域」に指定されたため、もう人が住むことはできません。住民を強制的に移住させる「復興」のあり方を問い続けた元住民の方々によるグループは、2018年に解散が報じられました。

井戸地区については、「河北新報」2022年7月24日に「仙台沿岸の津波被災地、広がる復興格差　現地再建地区の世帯数激減、荒廃続く」と報道され、若林区井土地区の世帯数が震災前の1割に減り、住宅跡地が荒廃している現状を、津波被災地における「復興格差」として伝えています。

状況の異なる地域、そして復興の内実の差異を、貞山運河はつないでいます。だからこそ、川俣さんが新浜地区のみなさんとともに貞山運河に渡した橋や添えた道は、「見立て」の力によりまだ見ぬ未来を架橋する存在ともなるのです。あの木道の、あの船橋の先に、震災とメモリアルをめぐる新たなあり方が、記念・祈念すること、伝承することのさらに先にあるものが、見えるのではないかと思えるのです【04−5】。

寄稿者

▼04 小田原のどか（おだわら・のどか）
1985年、宮城県仙台市生まれ。芸術学博士（筑波大学）。彫刻家、評論家。制作活動と並行して、彫刻研究、版元経営、書籍編集、展覧会企画、評論執筆を行う。

JOURNAL | art node artnode.smt.jp

アートノード ジャーナル 10号 2023年3月31日 発行
編集長｜甲斐賀治（せんだいメディアテーク）
編集｜田中千秋、丹治恵穂、江刺陽名子（せんだいメディアテーク）
アートディレクション・デザイン｜homesickdesign
印刷｜株式会社ビー・プロ
お問い合わせ・企画・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1／TEL: 022-713-4483
E-mail: artnode@smt.city.sendai.jp／URL: https://www.smt.jp

アートノードとは、「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」に多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台に創出する事業です。

本紙ジャーナルは、アートノードの進捗を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。

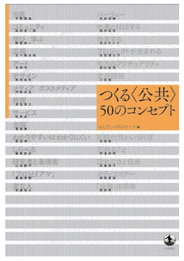
※「アートノード」は「せんだい・アート・ノード・プロジェクト」の略称です。

せんだいメディアテーク sendai mediatheque

© 2023 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます
この用紙はリサイクルできます。

つくる〈公共〉50のコンセプト

文化の結節点として知られるせんだいメディアテークに関わる50人が〈公共〉のあり方を問う。



発行日：2023年2月16日
編者：せんだいメディアテーク
発行：岩波書店
価格：2,860円（税込）

JOURNAL GALLERY

毎号アーティストをピックアップしてご紹介します

「うさぎの山薬や」2022／パネルに胡粉ジェッソ、水干、炭、岩絵具、オイルパステル、アクリル、箔

うさぎたちが集まっているお店は「山薬や」。薬草笥のある昔ながらの薬屋です。店内には、生薬とその原料があり、店先では薬を煎じてふるまっています。服で全身を覆ううさぎたちはどこか悪いのでしょうか？

私たちの自然や疫病との関わりが寓意的に表現されている本作は、作家自身がコロナ禍の2019−2022年に、月山の麓に移り住んで経験した様々な山での生活や住民から聞いた土地の物語をもとに制作されました。

田中望 たなか・のぞみ

1989年仙台市生まれ。東北芸術工科大学大学院 芸術工学研究科芸術工学専攻博士課程終了 博士（芸術工学）。人々がくらしを営む場所を対象にフィールドワークを行い、場所との関わりの中で生じる表現を探求している。主な展覧会に「田中望 -山づと-」（アートフロントギャラリー、2022年）、アートみやぎ2019（宮城県美術館、2019年）、受賞歴にVOCA展2014 VOCA賞（上野の森美術館、2014年）などがある。